

# 「磯野家と野比家が 共同生活する家」

マトメ：工房長 志村  
参加人数：7名

生活を想像することとは、どのようなことなのか。

生活とは、いまこの瞬間に、私が周囲に絶え間なく及ぼし続ける影響の現れと言えるかもしれない。あるいは、常に周囲から受け続ける影響の集積体とも言えるかもしれない。星に引力があるように、物体はいつも周囲からの影響の導線を束ね、そこから新たな導線を敷設し続けているが、導線の中から引き継ぎたいものを選び、後に起こる事に変化をもたらすことができる人間は、ただの物体とは違うのだろう。好むも好まないも、生命は生き、未来と過去を渡す導線を張り続ける。生活とは、そういう事柄全般を差しているのではないか。

## 他者ではない「他者」、内在する導線をたどる

たったいま、私はいかなる影響を周囲に与えているのか。これまでに、いかなる影響を振り撒いてきたのか。そしてこれから、私はいかなる影響を周囲に与えるのか、また過去のいかなる影響が、いまの私の影響に影響を及ぼしているのか。「生活」そのもの観るとは、こういった複雑な導線の絡み合いを束ねなおし、注目することと言えよう。

そして、いま自身の心に束ねられた導線をたどるには、自身を別の何者かに置き換えて、別の生活を眺めてみると容易い。

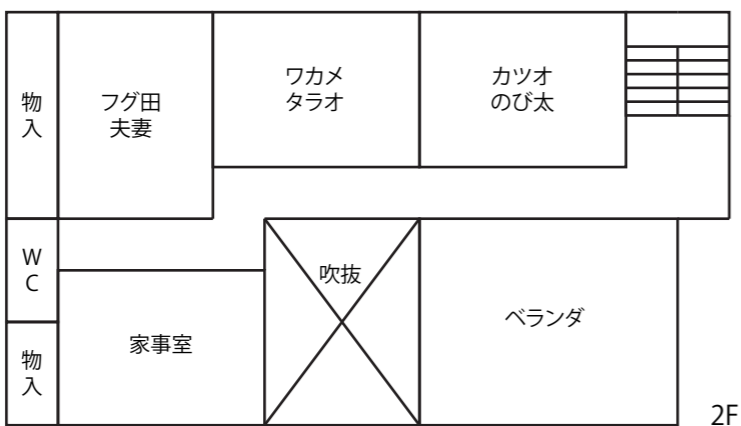
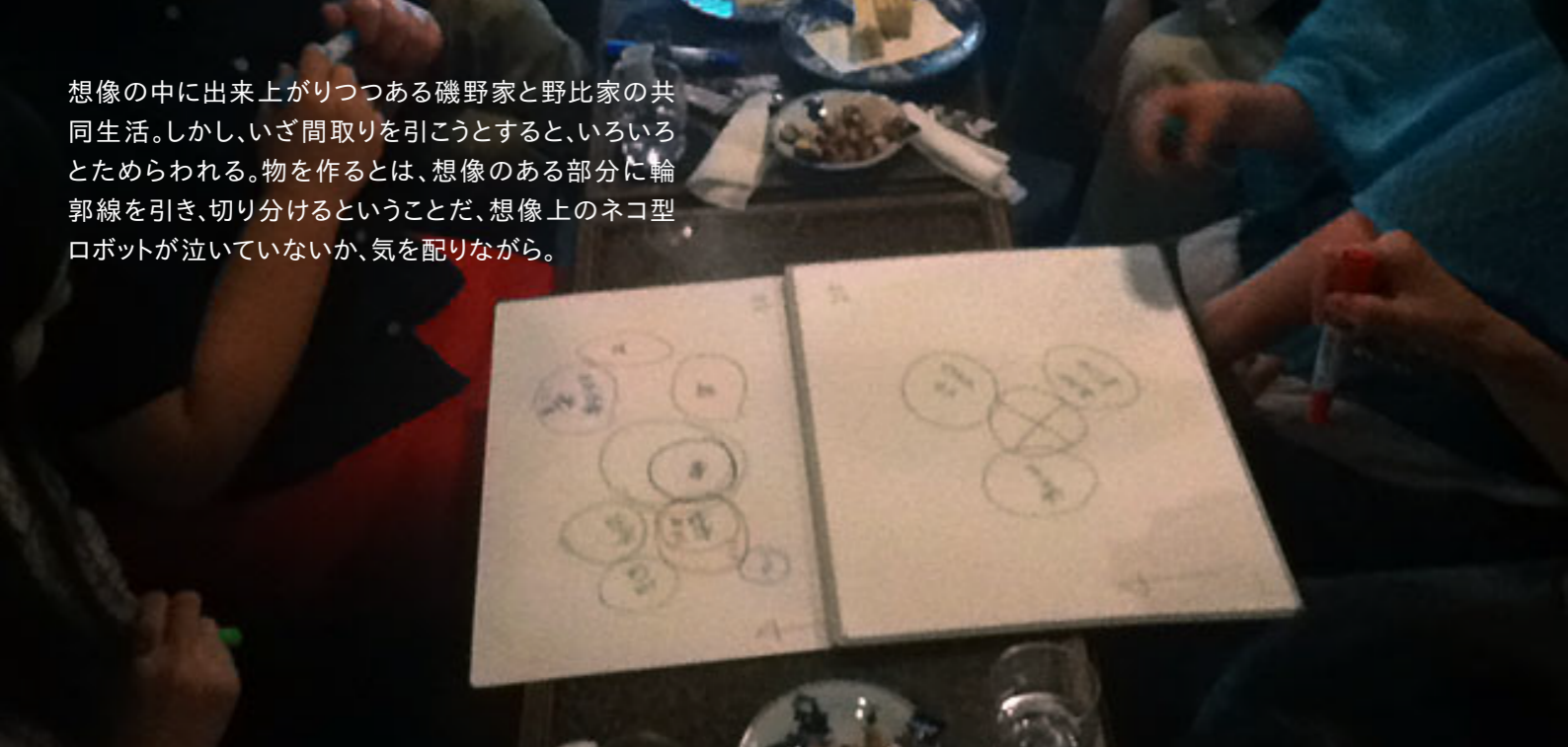
自身の中で形成された「磯野家」「野比家」という架空の生活者同士の干渉を想像し、そこに起こりうる生活時間を想うことで、自身の心に繋がる、多くの影響の導線があぶりだされてくる。物を見てあれこれ想うヒト

ならではの所作の一つと言えよう。「サザエさん」に興味を覚えなかった幼少期の私、幼く、経験の浅い私には、内面にある「導線の束」のことなど知る由も無かったのだが、情報が派手に可視化された現代を生きる子供たちにとっては、自身の内に張られた導線を辿ることなど、造作も無いことなのだろうか。

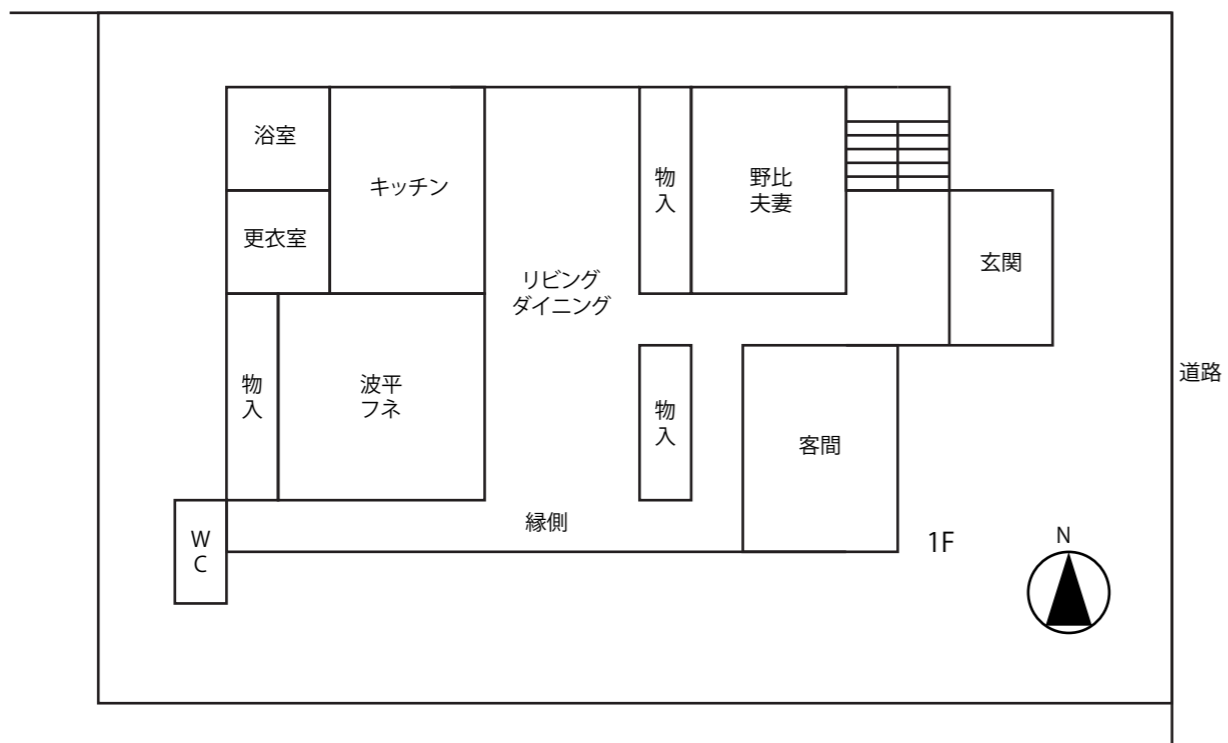
## 全ての導線が集まる、家の中心はどこか

家はいかにあるべきか。今回扱った「家」は、「屋根があるもの」とか、「内と外を隔てるもの」という類のものではなく、カツオやワカメといった、ヒトらしい情報を凝縮したメタファーのいれものとしての、例えば筆筒のようなものだ。カツオの引き出しとのび太の引き出しを同じにしてみようと、中にいた彼らにこのような変化が起こるかもしれないという、化学実験の様相も呈している。ただ、よく考えると、そこに住まう者の人格に完璧に沿う家を作ることなどできるわけがないし、そうしようとする心意気は、いささか野蛮に思える。

家を想うには、住まう者達の間にも流れる導線の流れを見極めることが肝となる。カツオの部屋、サザエの部屋、野比家の部屋、どこを切り取ってみても、かならずその導線が収束する点、つまり「家の中心」が見え隠れするのが、住まう者のことを想い作られた家なのではないだろうか。磯野家と野比家が共に暮らしてもなお、変わらず紡がれ続ける中心があるとしたら、それは波平の所得を支えに柔らかな和を結び続けるフネの功労によるのかもしれない。明治の頑なさをもつ磯野家の男子たちを包むその柔らかな風は、高い志とは裏腹にうだつの上がらない父と、永遠に落ちこぼれの烙印を押され、未来の科学技術というまやかしに翻弄され続ける哀れな少年、そして自尊心の高さ故か夫にも息子にも厳しくあたってしまふ母の、一家が引き継いできた陰質な導線を柔し、癒してくれるのかもしれない。その時は、ネコ型ロボットも役目を終え、長い休息につくことだろう。



ラフスケッチを基に間取り図を起こした。家の中心であるフネの優しいまな心は、吹き抜けのある大きなリビングから家全体に行き渡る



- さ
- ろ
- ん
- エ
- 房